
D & D D

澤群 キョウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D&DD

【Nコード】

N8979U

【作者名】

澤群 キヨウ

【あらすじ】

とある若者が、営業の為にある団地を訪れた。
しかしそこで営業活動をするためには、3つの試練を乗り越えなくてはならない。

古びた団地に隠された秘密とは？

すべての謎が明かされたとき、若者は、勇者になる。

「困ったなあ」

息子の呟きに、母が視線を向ける。

山越 やまこえ ひかる

光は悩んでいた。苦勞の末にようやく就職できたというのに、成績が奮わず毎日上司からイヤミを言われまくっているからだ。彼の仕事は、家庭用ウォーターサーバーの営業。大きなサーバーを試しに置かせてくださいなんていわれて、それはいいわねと答えてくれる家は少ない。入社以来何ヶ月も経つのに、いまだに契約どころか試用で置いてもらったことすらないという体たらくだ。

「このままじゃクビになっちゃうよ」

息子は何を望んでいるのか、母は感じていた。本人の友人や知り合いの類はもう全員当たっている。自分の友人にも何人も声をかけてみたが、快い返事をくれた人間はいない。

しかしこのままでは息子の将来が危うい。クビになったり、やる気を失って辞職した後、再びどこかに就職するとか、新しく情熱を持って他の業界に飛び込むとか、そういう行動力に欠ける若者だということとは誰よりも知っていた。見た目はちよつといいのに頼りない、少し残念な息子。なんとしてでも、最低1軒だけでも実績を作らなくてはならない。少しでも自信をつけて、未来につながる功績をのこさせなくてはならない。

しばらく考えて、母は最後にふうとため息をついた。もう、手段はこれしかない。最終兵器の投入を決めて、口を開いた。

「光、おばあちゃんのところに行ってみたらどう？」

「おばあちゃんのこと？」

この場合のおばあちゃんやえは、夫の母親である八重のことを指している。ここから車で1時間ほどの絶妙な距離にすんでいる義理の母は、少し古びたマンモス団地に住んでいた。義母に迷惑をかけると

いうことはなるべく避けたいが、背に腹は変えられない。

光はうーんと考えて、その提案に対する感想を素直にもらした。

「あそこって、年寄りばかりじゃない？ ウォーターサーバーなんか使うかなあ」

「そんなの、わからないでしょ？ 別に老人しか住めない場所なわけじゃないのよ。子供とか孫と一緒に住んでる人だっているだろうし」

母はここで、とてもいいことを思いついてパンと手を打った。

「そうよ。孫が遊びに来る人がいるわよ。あれだけおじいちゃんおばあちゃんばかりのところなんだから。そのウォーターサーバーはお湯がすぐ出るし、赤ちゃん用のミルクも作れますなんて言ったらみんな喜んで買っくんじゃない？」

「なるほどねえ」

「それに、お湯がすぐ出るならお茶もすぐ淹れられるんでしょう？ やかんで沸かすより安心だ、とかなんとか言えばもしかしたらもしかするかもよ」

「そうか。なるほど。お母さん、すごいね」

というわけで山越 光は次の日、久しぶりに祖母の家を訪れた。

可愛い孫の訪問を八重は喜んだが、おみやげだとして持ってきた大きな機械にはちよつと微妙な表情を浮かべている。

「光君、これはなんなの？」

「これはウォーターサーバーって言うんだ。ここをひねると、キレイな水が出るんだよ。こっちにするとお湯も出るの」

光ははりきって祖母に営業を始めた。始まってすぐにこれは単なるお土産ではないことに気がついて、八重は戸惑いの表情を浮かべている。

「これ、重たそうに見えるでしょ？ お水のタンク。だけどね、電話一本で専門スタッフが即、家まで運ぶし、頼めば設置してくれるから」

「これ、光君の会社で売ってるのかい？」

「そうなんだよ！　すごく便利だし、おばあちゃんのお友達にもぜひ勧めたいんだ」

あっけらかんとした笑顔を浮かべる孫に対して、祖母の表情は冴えない。

「どうしたの、おばあちゃん」

「ごめんね、光君。こういうのを売り込むためには、この団地の会長さんに許可を得ないといけないんだ」

「会長さん？」

「そうだよ。トラブルを避けるために、そういう決まりになってるの」

山越　八重の住んでいるマンモス団地

土井塚^{どいつか}フラワータウ

ンは今からもう40年ほど前に建てられた巨大な団地で、ここに住んでいる人間は建物同様、年を取った者が多かった。

古びた建造物に対して少々強引な営業をする業者も少なく、それに対抗するために団地の自治会は「営業をする場合の決まり」を作り、住民たちにそれを守るよう徹底していた。家になんらかの営業が来た場合、まずは自治会に報告し、その許可を得てから商談に入るようにしているのだ。これによって悪質な業者から、何人もの住民が守られてきたのである。

なので八重も、いくら可愛い孫とはいえ決まりを破るわけにはいかなかった。彼女は光を連れて自治会の会長宅の前に立ち、ドアを叩いた。

「あれ、山越さん、どうしたの？」

「あのね、この子は私の孫なんだけど、ちょっといい商品を皆さんに紹介したいらしくて……」

土井塚フラワータウンのE-1棟、306号室。

ここからは祖母の付き添いはNGということで、光は一人、中へ

通される。

「お邪魔します」

少し薄暗い廊下を抜けて、突き当りの部屋に入って青年は思わずのけぞった。

巨大な敷物の上に、老婆がドドーンと座っている。

敷物は、頭のついた熊がその毛皮をはがされて開きにされたものだ。その上に乗っている老婆は、顔はしわだらけで髪はボサボサ。頭には何のかわからないが大きな角をつけてまるで水牛のようになっている。手には長いキセルをもって煙を燻らせ、胡坐をかいて来訪者をギロリと睨んでいる。

ここは日本で、かつ首都圏と称される場所だったよな、と思いつつ、汗をかきかき光は前へ進んだ。

真ん中の老婆ON熊の横には、左右に5人ずつ正座している者がいる。まるで殿様への謁見のようなおかしな雰囲気の中、果たして座っていいものか立っていいものかわからず、おろおろしているとカーンという音が部屋に響いた。

「そこに座んな」

低い、ドスの効いた声だ。さきほどの音は、キセルですぐそばにある火鉢のようななか壺状のものを叩いた音だったらしい。老婆は壺をキセルで軽くカンカンと叩きながら続けた。

「早く」

「はい！」

慌てて床に正座する。

「山越の家の孫だって？」

「はい。あの、今日はウォーターサー」

「待てい！」

迫力のある声で一喝し、この団地の自治会長である小紫^{こむら} 還^{かえり}の母である、小紫 サキは目の前の青年を一瞥した。

「ここで営業したいんなら、こっちの言う事を聞いてからにするんだね」

「言う事を聞く?」

「自治会から出される3つの試練、全部達成できたら、営業の許可を出そうじゃないか」

サキはくつくつく、と悪代官のように笑っている。横に控える10人もそれに倣って小さく笑った。

「試練ってなんですか? どういうことですか?」

「悪徳業者を排除するために設けているのさ。あんたがどれくらい本気が見せてもらいたいんだよ」

サキのすぐ左隣に座っている、本来は1番エライはずの自治会長が答えた。

「本来はお前のような礼儀知らずの飛込み営業は全部お断りなんだ。山越のこの孫だつていうから、特別に試してやるんだぞ。ありがたき思いなつ!」

恐ろしい迫力でサキが怒鳴り、光はビクッと体を小さくした。

団地の中を歩きながら、光はあたりを見回した。小さい頃から何度も来ている場所だが、この巨大なアパート集合体がどれほどの規模なのかは考えたことがなかったことに気がつく。

「ここ、どのくらい人が住んでるんですか?」

青年の質問に、自治会長の還がフンと笑って答える。

「AからGまでそれぞれ5棟ずつ、各建物が4階建ての、各階6部屋ずつ」

7 x 5 x 4 x 6……頭の中で必死に計算し、光は840という正解にたどりついた。840世帯。もちろん空き部屋もあるだろうが、恐ろしく魅力的な狩猟場だ。

「ここは老人が多いから、営業やってる連中はこぞつてやってくる。そういうのは困るんだよ。騙されて高額な契約させられてなんて悲劇はこりこりだからな」

「騙したりなんてしませんよ。それに、月々1200円でメンテナンス代込みという良心的な価格設定ですし、今はキャンペーン中で」「そういうのは全部終わってからにしてもおう」

青年は仕方なく黙る。しかし、もし試練とやらを乗り越えれば話は聞いてもらえるわけであり、1軒1軒しらみつぶしに声をかけていくよりももしかしたらいいのかもしれない。そんな風に考えて、上司に教えられた感じのいい爽やか営業スマイルを湛えながら自治会長について歩いていった。

「ここだ」

たどり着いたF-3棟の401号室の前には、ゴミがうず高く積まれていた。部屋の前にたどり着く以前から異臭が漂っていて、1つ目の試練の内容はなんとなく、言われなくても伝わってくる。

「わかるな」

「はい」

1日かかって401号室のゴミはすべて取り払われた。

すっかり日が暮れた団地内を歩き、光は祖母の家へと戻り、疲れた体を投げ出してようやく一息つく。

「頑張ったね、光くん」

「うん……」

大問題が解決されて、周囲の部屋の住人からは惜しめない拍手が送られた。

「あの鷹野さんがちゃんと片付けるなんて、すごいね、光くんは」

部屋の住人の鷹野 瑞江は今まで他の住人からの苦情をまったく聞き入れなかったが、光の容姿が好みだったのか青年の説得を聞き入れ、大掃除をすると決意してくれたのだ。

同様の褒め言葉を自治会長からももらっていた。1つ目の試練はこれでクリアで、2つ目は明日挑むことになっている。会社には大口の契約のチャンスだと連絡をし、本日はクタクタの体を祖母の家

で休めることにして、青年は眠りについた。

次の日も、前日同様時間のかかる試練だと大変だと判断して、光は早く起きると再び自治会長のもとへ向かった。棟を間違えて4階まであがって降りたりしながらも、ちゃんと怪しげなキセル水牛老婆の前に本日も座る。

「やるじゃねえか。あの鷹野の家を片付けさせるなんて」

「はい、いえ、あの、はい」

肯定と謙遜で訳のわからない返事をする青年を見て、カツカツカ、とサキが笑う。

「いいだろう。今日は2つ目の試練を受けてもらうよ。還！」

あまりの迫力に緊張したものの、2つ目の試練とやらはただ単に雑用だった。足腰の弱い住人たちのために、荷物を運んだり掃除を手伝ったり、買い物を頼まれて出かけたり、単純な労働をこなしていく。

たくさん感謝の言葉が団地中にあふれて、光はとても幸せな気分になっていた。

会社の壁、部長の席の真上に掲げられている社訓を思い出す。

すべてはお客様の幸せのために

それはこういうことなのかもしれないと、たくさん感謝の言葉をもらって若者はしみじみと考えた。祖母の家で、2泊目の夜の食卓で向かい合いながら、今日はとてもいい体験をしたと孫は笑顔で話している。みなが敬遠するような仕事に率先して取り組み、単純によく働いたことにいい気分だったし、これだけの感謝をされたら営業の仕事にもすっかり繋がるのではないかという期待が生まれていた。

「あの、これは一体、なんですか？」

「第3の試練さね」

次の日の朝、A-5棟の104号室の前に光は立っていた。目の前の扉は板が打ち付けられ、更に怪しげな札がベタベタと貼られて「封印」されている状態だ。

「戻るんなら今のうちだよ」

ロクな説明もしないまま、サキはカツカツカ、と大きな声で笑った。本日はキセルのかわりに大きな木でできた杖を持っていて、それをカーンと床に打ちつけると目の前の若者に向かってすごんで見せる。

「どうする？」

「どうするもなにも、どうしたらいいんですか？」

「やる、と言わない限り、説明はできない。これは、この団地の最高機密なんぞね」

そんなことを言われても、ゆとり世代の若者は困るばかりだ。1つ目、2つ目とはあまりにも違う3つ目の試練の雰囲気圧倒され、悩み、しばらくどうすべきか考えて覚悟を決めた。

「やります」

昨日感じた、シンプルな幸福。それを光は思い出していた。きっと、ウォーターサーバーはこの人たちの役に立つ。料理に、お茶に、赤ちゃんに。すべてはお客様の幸せのために。そして社訓はこう続く。

お客様の幸せが、私たちの幸せに

「僕は皆さんの役に立ちたいんです！ ぜひ、わが社のウォーターサーバー」

「その続きは、ここから帰ってから言うんだね」

自治会の役員たちがえっさはいさと封印をはがす。そして、全員が左右に列になって並び、花道を作った。

「ここはこの団地の地下に通じている……」

「地下？」

「そうさ。お前のやる気はよくわかった。あとは、地下の自治会長の許可をもらえば完了だ」

サキが目配せをすると、後ろに控えていた還がリュックサックを渡してきた。それを受け取って早速中身を確認すると、懐中電灯や保存食が少し入っているのが見える。

「地下の自治会長さんはどちらにいらっしゃるんですか？」

「そんなのは行ったらわかるさ」

バリバリと打ち付けられていた板がはがされ、とうとう扉が開く。

なんだ地下って。珍しい造りだな。

そんな風に考えながら、光はわりと気楽な気持ちで中へと足を踏み入れた。背後で扉が閉められ、何かわからないが重々しい音が響く。あっという間に闇に包まれて、慌ててリュックから懐中電灯を取り出してスイッチを入れる。

そして廊下を進み、その先にある下り階段を降りて、若者は足を止めた。

ダンジョンじゃん

10文字以内でまとめなさいという問題を出された場合の模範解答はこうであろう景色。15文字以内でいいのなら、「ガチでダンジョンじゃね？」にレベルアップするであろう光景にあっけにとられる。

迷宮探索系RPGをそのまま現実にした様子にしばし呆

然とし、やっぱ無理、とばかりに若者は階段を登って入り口のあるはずの場所をガンガンと叩いた。

しかしのぞき窓はふさがれ、ドアの下の方についているはずの郵便受けもふさがれている。何度叩いても、どれだけ声をあげても何の反応もない。信じられない展開に光は思わず座り込んでしまった。そしてポケットに入っているはずの携帯電話に気がついて取り出したが、たまたまなのかそれともそういう風にされているのか、表示は圏外で通じない。

ガツクリとしばらく落ち込んだ後、青年は立ち上がった。ここで呆然と座り込んでいても事態は進展しないはずだと自分を奮い立たせ、ダンジョンへと足を踏み入れた。地下の自治会長のもとを目指して、リュックの中に入っていた懐中電灯を右手にそろそろと進んでいく。

こうして、彼の迷宮探索物語は幕を開けた。

奥へ進み角を曲がると、明るい通路に出た。突然の蛍光灯の出現に少々驚き、同時に安堵する。その光景はこの2日間で散々見た団地の廊下とほぼ同じ造りであり、ドアと窓が整然と並んでいる。それぞれの家には部屋番号と名前も書かれていて、そのノーマルな様子に少し安堵して若者は足を進めていった。

そして、初の地下の住人と遭遇した。

すぐ前の扉から出てきた1人の女性はすぐに光に気がつき、その足を止めて様子を伺っている。

「あ！ あ、すみません」

ごく普通の、30代とおぼしき女性に若者は声をかけた。

「……」

「地下の自治会長さんがどこにいるか、ご存知ないですか？」

「自治会長ですって？」

その単語を聞くなり顔色を変えて、女性はいきなり襲い掛かってきた。

「うわああ」

突然のいわれなき暴力に、光は慌てた。慌てたが相手のスピードがそれほど速くはなく、いや、むしろかなりのんびりしていたので両手を掴んで対抗する。ほんのちよつともみ合い、やめてくれという願いをまったく聞き入れてもらえないことに業を煮やしてドーンと突き飛ばした。

「きゃあ！」

「あつ、すみません……」

はあはあと荒く息をしながら、軽く謝る。すると女性は顔をポツと赤く染めて、突然意外な単語を口にした。

「ステキ」

「え？」

「抱いて！」

今度は両手を広げて抱きついてきたのを、慌てて押しのける。また散々もみあつて、光は再び女性をドーンと突き飛ばした。

「なんなんですか！」

「え？　だって、こういう設定だから」

「設定？」

「地下なんですよ？　私たちは地下団地妻で、冒険者からしたらモンスターなんです」

「すいません。……ちよつとわかりません」

どういふことなのかと女性に問いかけると、説明するからと家の中へ招かれた。女性の出てきた扉には「奥園」と書かれていて、中はごくノーマルな住居である。

キッチン横のテーブルについてお茶を出され、光は汗を拭いた。

「初めてだったんですね。モンスターとの戦闘」

「……」

「あなた、なにかの営業の人なんですよ？」

「ええ、ウォーターサー」

「それはいいんです。とにかく、この団地で営業したい人はこの地下を攻略して自治会長に許可を取ってもらわないといけないんです」

「はあ……」

「ところで、うちの主人、しばらく帰ってこないんです」

再びモンスターの攻撃。掴みかかってきた腕を光は慌てて払った。
「ホント、やめてください」

「だって設定だから」

「設定ってなんなんですか？」

「この地下迷宮を進むには、団地妻を攻略していかないと」

光は思わず目を閉じて唸った。その隙を逃さず、再び団地妻の攻撃。

光は敵（ミワコ・34 モンスターレベル1）を倒した！

倒したっていうか、攻略した！

勝利を収めたというのに少々呆然として、光は奥園家から出た。

そして、少し迷って、結局先へ進む。

戻っても扉は閉ざされており、出ることはできない。こうなった
らさつさと自治会長を探して許可をもらうだけだ。

しかしそこに、第2のモンスターが現れた。

今度は先ほどのミワコよりも少し若い、ほんわかした雰囲気
の女性だ。

扉から出てきたその女性は、光に気がついて少し驚いた顔で冒険

者を見つめている。

光の方も、先ほどのように襲い掛かられないか、しばし立ち止まって様子を伺う。

「あの……」

先に口を開いたのは、女性の方だった。

「はい」

少し構えた姿勢で返事をする。

「何かの、営業の方ですか？」

「はい、ウオーターサー」

そこで突然、後ろからガバっとしがみつかれた。突然のことに慌てていると、やはり目の前の女性も襲い掛かってくる。

全力で暴れて、2人をドーンと引き剥がす。

「……ステキ！」

「抱いて！」

団地妻たちの設定にブレはなかった。あつという間に家の中に引きずり込まれ、光は「旦那は今夜帰って来ないの ATTACK」をおみまいされる。

光は敵（シヨウコ・26 モンスターレベル1）（ミツエ・41

モンスターレベル5）を倒した！

倒したっていうか、攻略した！

光はちよつと納得いかないまま、でもなんだかんだどんどん敵を倒していった。倒していったっていうか、攻略していった。

得た経験値でレベルは上がり、そして、この迷宮攻略の糸口を少しずつ掴んでいった。

倒したモンスターによつては、おいしいご飯を用意してくれるとか。

団地夫（これもモンスター・仲間を呼ぶコマンドで出現）が現れない場合はお布団で眠れるとか。

団地妻に効果のあるアイテム（香水とか）をもらえるとか。

そんなこんなで探索を進めていくと、とうとう中ボスが現れた。事前に、ミズキ（31）・モンスターレベル8が教えてくれた通り、各棟にはそれぞれボスクラスの団地妻がおり、それを倒すことで次の棟に進むことができるのだ。

今やレベルが18になった光にとって、1体目の中ボスは敵ではない。あつという間に倒すと、パララーと景気のいい効果音が鳴り響く。

光はA-1棟のボス（アキヨ・45 モンスターレベル16）を倒した！

倒したっていうか、年とか関係なく攻略したった！

さすがは中ボスで、倒した際のご褒美は半端ない。地下団地の地図の一片と、伝説の武具と財宝なんかも手に入った。

慣れとは恐ろしいもので、光は最早疑問を感じることもなく、迷宮をズンズンと突き進んだ。

時には可愛い系妻にマジ惚れしそうになり、時には間男として団地夫の集団に追われ、地下では最高齢妻（キヌヨ・88）にカッツシくんは可愛いねえと鼻唄されながら。

迷宮に渦巻く、愛、友情、……そして裏切り。
それらをすべて乗り越え、光は進んだ。

そして、伝説の地下団地主となった。

A - 5 棟の104号室の扉がギシギシと音を立て、そしてズバーンと手前に倒れる。

そのあまりにも大きな破壊音に近所の住人が集まってザワザワしている中、彼は現れた。

遅しく成長し、レベルはカンストの100まで上がった上に光輝く伝説の地下団地主の武具をまとった、山越 光である。

彼は悠々と歩き、住人が避ける中、進んだ。目指すはE - 1 棟、306号室。

その扉をバーンと開けると、中から住人が慌てて飛び出してきた。「なんですかあなたは!？」

「帰ったぜ、勇者が……!」

「なんだその格好は! 変質者だな、通報するぞ!」

焦って306号室の表札を確認すると、「小紫」ではなかった。お引越してもしたのだろうか。

勇者は慌てて走った。目指すはG - 2 棟の202号室、つまり祖母の家だ。

しかし何度ドアを叩いても応答はない。祖母はもう77歳。嫌な予感が背中を走りぬける。

彼は走った。自分の家へ。車で1時間の道のりは走ると遠くて、レベル100でも結構かった。

「ホント何やってたの、3年間も」

「いや、地下の攻略を……」

「いくら仕事がつらいからって、連絡のひとつも入れないなんて！」

あやうく葬式出そうかというところだった、という母の言葉に、地下団地王はグッタリする。レベル100なのに、すごい耐性を持っているのに母の厳しい叱責には効果がないらしい。

「おばあちゃん、最後までアンタの心配してたわよ！」

「えっ」

「会社もクビになってるのよ！」

「えっ」

「これからどうするの!？」

散々怒られてしょんぼり落ち込んで、結構長い間引きこもった後、山越 光は素晴らしい事業を思いついた。

地下迷宮攻略アトラクション「D&DD」……ダンジョンズ・ア
ンド・ダンチツマの誕生である。

地下団地王の要請に、自治会長もイヤとは言えずに協力をしてくれた。

団地妻という言葉にこめられたエロスの響きと、地下迷宮攻略という男のロマンは見事に融合しビッグバンを起こした。全国の好事家たちが集い、毎日地下団地は大賑わいである。

その様子を、伝説の地下団地王は満足そうな顔で見つめていた。彼のオフィスには「みんな、勇者になれる」という標語が掲げられている。

始まって1ヶ月で、あっさり警察の手が入ってこの事業は失敗することになるのだが。

……まあ、そんな野暮な話はまた別な機会に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8979u/>

D & D D

2011年8月31日03時25分発行